

卵母細胞を形成しており、卵子の元になる細胞は胎児の間に生成されているのです。

従って、出生後に新たに生成することが出来ません。

これまで医学的な見解として胎児の発育に関するリスクは認められており、研究対象になっておりましたが、出産後順調に成長していれば被曝の影響はなかったものと考えられてきたが、近年大きな問題が提起されました。



それは、チェリノブイリ原発事故後、25年が過ぎましたが、事故当時幼児や胎児で被曝した女性達が成人し、結婚、出産の時期を迎えたところ、「生殖系に対する影響が大きく、不妊や流産などが深刻な問題になっている」と現地の医師が証言しています。

生殖細胞に与える影響に関する研究や治療方法はこれからの問題になりました。

民間団体である「母乳調査・母子支援ネットワーク」が、母乳を調査をしたところ一部ですが、母乳から1kgあたり6.4～36.3ベクレルのヨウ素131が検出されたことがあります、が、この数値は乳児の暫定基準を下回っており、乳児の健康を損なうようなことはありません。

医学的な見解ですが、母親が取り込んだ放射性物質の4分の1が母乳になり乳児の体内に取り込まれる、となっております。

仮に母親が100ベクレルの放射性物質を含む水を飲み続けていると、乳児は母乳を介して25ベクレルの放射性物質を体内に取り込んでしまい内部被曝になります。

全ての成分に関し母乳に勝るモノはありませんが、もし心配であれば一部粉ミルクにするのも1方法でしょうが、原料となる原乳が僅かですが汚染されている可能性もあり、また水道水も絶対に汚染されていないという保証はありません。但し全てにいえることは暫定基準値以内であり、それほど神経質にならなくとも大丈夫です。

それでも心配ならミネラルウォーターにしますが、もしスーパーで各種のものがあつたら軟水を選びましょう。国産の粉ミルクはミネラル成分の少ない軟水用に成分調整がされており、硬水が多い欧米からの輸入品より、国産である軟水を選びましょう。

避難圏から各地に避難し転校した児童あるいは幼稚園児が「放射能がうつる」といじめられたり、疎外されたりと二重、三重の苦痛を味わっていることが報告されております。

結論を先に言いますと、放射能がうつるなど、まさに非科学的なとんでもない誤解で、悲しむべき無知といえますが、子供達が勝手にそう考えたわけではなく、母親が「うつる」から近づくなと指示したことも併せて報告されています。

事故直後は福島ナンバーの車が駐車を断られたり、ホテルのフロントで住所を福島県と書いた途端宿泊を拒否されたり、無知なるが故の不法行為は数多くあったようです。

被災地の妊婦の注意点	① 冷え予防 重ね着や毛布、カイロを使って、できるだけ暖をとる	An illustration of a pregnant woman in a pink dress, standing and looking to the right.
	② 水分を十分取る トイレを気にして水分を控えると、脱水症状を起こし危険	
	③ 感染症に気を付ける 人が多い避難所では風邪などがはやりやすいが、妊娠中は抵抗力が落ちている	
被災地の母乳育児	① 母乳が減っても大丈夫 一時的なので心配なし。 できる範囲でリラックスし、授乳を続ける	
	② 周囲も心配りを 毛布、バスタオルを貸すなどの配慮を。 仕切りなどで授乳スペースをつくれるとベスト	